



Title	外来語の片仮名表記と表記体：『太陽』前誌群による考察
Author(s)	深澤, 愛
Citation	語文. 2004, 83, p. 36-48
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/69045
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

外来語の片仮名表記と表記体

—『太陽』前誌群による考察—

深澤愛

『太陽』前誌群との比較から、前誌群における外来語片仮名文字列についての考察の着眼点を示す。四節では符号と表記体とを視座として『太陽』前誌群における外来語片仮名文字列の特質を明らかにし、その特質が表記体と相関関係にあることを指摘する。

二 調査資料及び考察対象

『太陽』は、それまでの博文館発行（明治一〇～二七（一八八七～九四）年発行）の諸雑誌を統合する形で創刊された。それらのうち、『太陽』に直接する（1）の五誌を『太陽』前誌群（以下、「前誌群」と略す）と呼び、本稿での資料とする。

（1）『日本大家論集』『日本之法律』『日本商業雑誌』『婦女雑誌』『日本農業新誌』

各誌の発行期間を図1に示す（各誌の略称は（1）の傍線部である）。色の付いた年が今回調査した年である。（1）の各誌から、創刊年月より一年毎に創刊月と同月の一冊ずつ（隔週発行になつ

一 はじめに

近代語における外来語表記についての研究は、これまでにも様々な形で行われてきている。しかし、漢字・片仮名・平仮名の各種が行われていた外来語表記が、なぜ片仮名表記主流へと移行していったのかについては、必ずしも從来明確にされてきたとは言えないだろう。

片仮名表記主流への移行について考察を試みた深澤（一〇〇三）は、博文館の総合雑誌『太陽』（明治一八～昭和三（一八九五～一九一八）年刊）を資料として、漢字平仮名交じり文における外国地名表記と文体との連関を取り上げたものである。これを承けて、本稿では『太陽』以前の諸雑誌—『太陽』前誌群—における外来語片仮名表記について、そこに使用された片仮名文字列の特質を明らかにする。本稿の構成は以下の通りである。まず二節では調査・考察の対象について述べ、三節では『太陽』と『太

1

年	20	21	22	23	24	25	26	27	28
論	M 20.6 創刊								M 28.1
法		M 21.2 創刊							
商				M 23.10 創刊					
婦					M 24.1 創刊				太陽
農						M 25.1 創刊			

抽出し、調査資料とした。調査資料のうち、漢文・韻文・タイトル・引用・表を除いた散文部分を調査範囲とする。考察対象となるのは、調査範囲に見られる、外国地名・人名など固有名詞を含む外来語である。ただし、外国地名の簡略表記（「米国」等）、ルビ付きの表記（「^{ナガハシ}拿破崑」等）、傍点の付された例（（2）「^{（3）}こんもんせんす」等）は対象としない。本行にのみ表記されている例（（3）「伊太利」「コロムバス」「亞米利加」等）を対象とする。なお、以下の考察においては、雑誌の別はおいておき、刊行年の同じものをひとまとめりの資料として扱う。

（2）理學宗ハ、こんもんせん、

簡略表記（＝米国等）、ルビ付きの表記（「拿破崑」等）、傍点の付された例（（2）「こんもんせんす」等）は対象としない。本行にのみ表記されている例（（3）「伊太利」「コロムバス」「亞米利加」等）を対象とする。なお、以下の考察においては、雑誌の別はおいておき、刊行年の同じものをひとまとめりの資料として扱う。（5）

本節では、『太陽』における外国地名表記と前誌群における外國地名表記との比較を行う。前誌群における外来語の片仮名表記を考察する上で有効な視座を明らかにするのが目的である。深澤（一〇〇三）では、外国地名表記を取り上げた。また、調査した範囲において文章は全て漢字平仮名交じり文であった。よって、本節で比較する前誌群の用例も、漢字平仮名交じり文における外國地名に限定する。『太陽』は深澤（一〇〇三）で取り扱ったもののうち、第一巻から第一〇巻までの各第一号（明治一八〇三七年の一月号）を対象とする。

さて、『太陽』と前誌群との間に見られる、片仮名表記外来語の大きな違いの一つに符号の有無がある。前誌群においては、(4) (5) のように傍線や鉤括弧などの符号が併用された表記が併用されない表記と同程度存在する。これらの表記法は『太陽』において漸次衰退していく。ただし、『太陽』においても、初期の巻には(6) (7) のように符号が併用された表記の例が、併用されない表記と同程度存在する。その点では、前誌群と似た様相を呈している。本節では、こうした符号に注目して考察を進めたい。

す、ノ、修、身、法、ナ、リ、ト、（論、③、48⁶）

(3) 伊太利人コロムバス氏が亞米利加發見となし (商248)

三 『太陽』と『太陽』前誌群 —符号に注目した考察の有効性—

(4) 佛國にては一鏈の長さ十メートル(我三十二尺)なる

を用ふ
(農②26)

(5) 本邦製「セメント」は其數四千樽に達したる(商(5)43)
(6) ダンテもなく、ルーテルもなく『太陽』一卷一号28

(7) 死の直前初めて「ペスト」病なることを知りしの實例

あり、『太陽』六卷一号(16頁)

このような符号、特に一重傍線や二重傍線は朱引きの流れを汲むものと思われ、小林(一九八二)が「つまり、地名、人名の右側に傍線を付すのである。この右側に傍線を付す表記スタイルが明治期の一般の表記となるようである。」(一四六頁)と述べるよう、前誌群においても多用されているものである。また、府川(二〇〇一)が次に述べるように、活版印刷において広く用いられていたのが、その後は衰退していくものである。

一時期一般化していましたが、消えていったものに傍線があります。傍線は幕末の洋学の翻訳書などの中で多用されたものであります。(中略)傍線は活版でも技術的に極めて困難だというほどのことはありませんが、大正以降ということになると、あまり見なくなります。(二三三—三四四頁)

『太陽』における符号の衰退は基本的には慣習の変化として捉えられるだろう。しかし、『太陽』の初期と前誌群とにおける外国地名片仮名文字列の性質の違いを考えると、符号は重要な手掛かりとなるのである。

表1は、前誌群と『太陽』とにおける、片仮名表記外国地名の符号の有無(異なり語数)を文体ごとに示したものである。表中「有」欄は符号が併用された表記(以下、適宜「符号有り」と呼ぶ)による外国地名の語数を、「無」欄は符号が併用されていない表記(以下、適宜「符号無し」と呼ぶ)による外国地名の語数

を示す。どちらの文体においても、符号有りと符号無しとの合計数が拮抗している。この時期が、符号が併用された表記と併用されない表記とが同程度の頻度で使用された時期であったことを窺わせる。ただし、詳細に見ていくと、そこには一つの傾向がある。表1合計欄によると、符号の有無の割合によって、明治二〇年から三七年までを四期に分けることができる。すなわち、符号有りの用例が優勢な二四年までと、符号無しの用例が優勢になる二五年から二七年、再び符号有りの用例が優勢になる二八年から三三年⁽⁹⁾、再び符号無しの用例が優勢になる三四年以降である。いま仮に、これらの四期を、I期(二〇—二四年)II期(二五—二七年)III期(二八—三三年)IV期(三四—三七年)と呼ぶ。この四期の違いは何を表しているのだろうか。特に注目したいのは、表1に含まれる語のうち漢字表記の例も見られる語における、片仮名表記の符号の有無である。これに注目することにより、漢字表記に対する片仮名表記の特質をつかむ手掛かりが得られるからである。まずは、漢字表記の例も片仮名表記の例も見られる語についてみてみよう。表2は、片仮名表記と漢字表記の両表記の例が見られる語の割合を、各期ごとに示したものである。「両」欄は片仮名・漢字の両表記の例が見られる語の数を、「総」欄は、片仮名表記される語の総語数を示す。数値は共に異なり語数である。文語文体を見てみると、漢字表記の例も見られる語の数が、I期からIII期にかけて、漸増していることが分かる。IV期はIII期に比べて割合が落ちているが、それでも、I II期の一割前後とい

う値に比べれば、割合は増加していると言えよう。口語文体においては、I期に該当例が全くなくII期以降は二割前後で数値が一定している。文語文体とは異なる様相を見せており、表1からも分かるように、口語文体での用例は少なく、全体の傾向を左右しているのは文語文体の方である。また、口語文体では文語文体よりも早く増加傾向（I期からII期）が安定（II III IV期）したとも考えられる。このように考えるなら、片仮名文字列の特質をより反映しているのは文語文体であり、口語文体の数値の現れ方は文語文体における傾向を否定するものではないと言えるのである。では、漢字表記・片仮名表記両方の例が見られる語において、

片仮名表記の符号の有無はどうなつていいのだろうか。表3は、表2に含まれる語の中で、符号有りの用例と符号無しの用例とが共に見られる語の割合を各期ごとに示したものである。口語文体には、このようない例が全くないため、文語文体のみの数を示した。表中、「両」欄に示した数値が、符号有り・無しの両表記の例が見られる語の数である。「総」欄は文語文体において、漢字表記・片仮名表記両方の例が見られる語の総語数を示す。

表1

年	文語		口語		合計	
	有	無	有	無	有	無
20			1		1	
21		19		1		20
22	12	5			12	5
23	17	3			17	3
24	30	2			30	2
25	17	51	4		22	51
26	8	26			8	26
27	16	58	13	14	29	70
28	56	70	15		70	70
29	39	38			39	38
30	69	47		2	69	38
31	73	33			73	33
32	81	7			81	7
33	72	16	6	4	79	18
34	22	82	2	2	24	84
35	60	53	4	2	64	55
36	28	46		23	28	68
37	8	32		9	8	41
計	491	485	43	45	534	527

表3

期	両	総	%
I	1	41	2.4
II	2	63	3.2
III	18	79	22.8
IV	3	74	4.1

表2

期	文語文体			口語文体		
	両	総	%	両	総	%
I	8	41	19.5	0	17	0
II	15	63	23.8	6	29	20.1
III	43	79	54.4	5	29	17.2
IV	25	74	33.8	6	31	19.4

まず、符号有りの例が優勢なⅠ期とⅢ期とを比較してみよう。

表3を見てみると、Ⅰ期では、両表記が行われる語は、「パリ」一語だけ（「佛京パリスの」「本家本元なるパリス」）「青森の果てよりパリスの流行を問ひ合わせ」いずれも商①44）である。これに対し、Ⅲ期では、両表記される語が一八語（アラビア、イギリス、インド、オランダ、カリフォルニア、ギリシャ、シカゴ、シンガポール、ニューヨーク、パナマ、パリ、フィリピン、ブラジル、ペルシア、マルセイユ、マレー、ラングーン、ロンドン）に及ぶ。

次に符号無しが優勢なⅡ期とⅣ期を比べると、若干Ⅳ期の値が高いものの、両者にはほとんど差がない。符号有りが優勢の場合には時期による差が顕著になるのに、符号無しが優勢の場合は時期による差がほとんどないのである。このことから、符号有り・無しの両表記の例が見られる語の増加には符号の存在が関わると言える。つまり、両表記される語について、時期による変化をより如実に示しているのはⅠ期とⅢ期の組み合わせであると考えられる。よって、Ⅰ期に比してⅢ期で両表記される語が大幅に増していることは、時期が新しい方が両表記される語が多くなるという傾向が、全体としてあることを示すものと思われる。そして、Ⅲ期に符号有りにも無しにも表記される語が多いことは、符号の衰退という流れの中で見れば、符号有りの表記と無しの表記とがゆれの関係にあることを示しているといえよう。Ⅲ期の両表記の様相は、符号の併用が形骸化してく過程で生じるゆれと考えること

ができるのではないか。

ここで、符号が形骸化する前と後、つまりⅠⅡ期とⅢⅣ期とで区切ると、前誌群と『太陽』との境界に一致する。ここから、前誌群における外国地名片仮名表記と『太陽』における外国地名片仮名表記とには、符号付き片仮名文字列の質に違いがあると考えられる。『太陽』において片仮名と漢字の両表記が行われる外国地名については、既に深澤（一〇〇三）で、片仮名表記と漢字表記とで表記選択が行われると考えた。これによって、表記選択における符号付き片仮名文字列の位置付けについて仮説をたてると、次のようになる。表2に見るようく、ⅠⅡ期は漢字と片仮名との両表記の例が見られる語が比較的少ない。一方、ⅢⅣ期はそのような語が比較的多い。そして、表3に見るようく、時期が新しい方が、片仮名文字列に併用される符号は形骸化していると考えられる。この違いは、表記選択においては次のような違いを示していると考えられる。符号が形骸化しつつある『太陽』においては、符号の有無にかかわらず、漢字文字列一片仮名文字列の選択が行いややすい。それに対し、符号が形骸化していない前誌群においては、符号を加味しない表記選択は難しい。つまり、前誌群においては、漢字文字列と片仮名文字列とは、文字列だけでは表記選択の選択肢として同列に扱うことのできないものであると予測される。

以上見てきたように、符号に注目することは、外来語片仮名文字列の特質を考える上で重要な着眼点の一つとなる。そこで、次

節でも符号を手掛かりとして、前誌群における外来語片仮名文字列について考察を進めたい。

四 『太陽』前誌群の外来語片仮名文字列

四・一 符号の有無と表記体

四・一・一 卓立表記と非卓立表記

四節では、前誌群における片仮名文字列の特質について、対象を外来語全体に広げて考察する。前節では符号という観点から『太陽』と前誌群との違いを述べたが、『太陽』と前誌群とのもう一つの大きな違いとして、表記体の違いが挙げられる。深澤（二〇〇三）で取り上げた範囲において、『太陽』の文章は全て漢字平仮名交じり文であるが、前誌群では漢字片仮名交じり文の文章と漢字平仮名交じり文の文章とが共存している。そこで、前誌群の検討にあたっては、符号の有無と共に、表記体の違いをも考慮に入れる必要がある。

まず始めに外来語表記における文字列・符号、及び表記体の組み合わせについて整理しておきたい。漢字片仮名交じり文及び漢字平仮名交じり文における外来語表記には、(8) に挙げた二つの場合が考えられる。各項目の後の (a) ～ (d) は、(9) における分類を示す。また、これら①～⑫に該当する例の異なり語数を示したのが表 4 である。表中にある①から⑫の丸数字は、(8) の各項目と対応する。

(8) 漢字片仮名交じり文における場合

- ①漢字文字列 (符号無し) : (a)
②漢字文字列 (符号有り) : (a) + (d)
③片仮名文字列 (符号無し) : (b)
④片仮名文字列 (符号有り) : (b) + (d)
⑤平仮名文字列 (符号無し) : (c)
⑥平仮名文字列 (符号有り) : (c) + (d)

漢字平仮名交じり文における場合

- (7)漢字文字列 (符号無し) : (a)
⑧漢字文字列 (符号有り) : (a) + (d)
⑨片仮名文字列 (符号無し) : (c)
⑩片仮名文字列 (符号有り) : (c) + (d)
⑪平仮名文字列 (符号無し) : (b)
⑫平仮名文字列 (符号有り) : (b) + (d)

(8) に挙げた一二項目は、表記体との関係によって分類される二つのパターンと、符号を付すという表記法との組み合わせによって成り立っている。そのパターンを示したのが (9) である。

- (9) (a) 漢字で表記する。
(b) 表記体を構成する仮名と同じ仮名で表記する。
(c) 表記体を構成する仮名と異なる仮名で表記する。
(d) 符号を付す。

(9b) は、漢字片仮名交じり文において片仮名文字列で、あるいは漢字平仮名交じり文において平仮名文字列で表記することを表す。(9c) は、漢字片仮名交じり文において平仮名文字列で、あ

表4

(A) 漢字片仮名交じり文における場合

符年	平仮名		片仮名		漢字	
	有	無	有	無	有	無
20			90	20		24
21		39	33	6		34
22		1	73	2	2	29
23	44	114	5	8		37
24	68	20	48	57	7	35
25			58	26	2	34
26			87	2		35
27			3	8		4

(B) 漢字平仮名交じり文における場合

符年	平仮名		片仮名		漢字	
	有	無	有	無	有	無
20			3	3		2
21			2	84		28
22			53	34	3	39
23			32	32		32
24		3	89	23	7	31
25			146	120	3	52
26		3	71	87	2	46
27			105	219		63

るいは漢字平仮名交じり文において片仮名文字列で表記することを表す。

(9a) (9b) では、表記体を構成する文字によって外来語が表記される。(12) (14) (15) 参照) が、(9c) (10) 「ページ」 (11) 「ういりあむ」、及び (9d) は、表記体の構成には基本的に関わらない文字や符号によって表記される点において、(9a) (9b) とは区別される。そこで本稿では、(9c) 及び (9d) を卓立表記、(9a) 及び (9b) を非卓立表記と呼び、両者を区別する。

(10) 之を論ずるも半ページを過ぐることとなるべし (法④)

(11) ういりあむ第三世帝ノ時ニ至リ (論②61)

漢字文字列、すなわち (9a) (+ (9d)) の場合は、表4①②⑦⑧

四・一・二 外来語片仮名文字列と卓立表記

まず、表記体を構成する仮名と外来語文字列の仮名とが同じ場

が示す通り、表記体による大きな違いはさほど見られない。これは、(12) のような非卓立表記の場合も (13) のような卓立表記の場合も同様である。

(12) 歐羅巴と亞細亞との貿易に駱駝の背を驅りて (商②48)

(13) 曆山王、拿破翁帝ノ跡ヲ慕フテ、(論⑥46)

むしろ表記体との関わりで大きな違いが見られるのは、仮名文字列、すなわち (9b) (+ (9d)) 及び (9c) (+ (9d)) についてである。これらに注目することによって、外来語片仮名表記における、片仮名文字列の特質が明らかになると考えられる。

合((9b)・(8)・(3)(4)と(11)(12))について検討しよう。表4(A)

が示すように、(3)(4)すなわち漢字片仮名交じり文における片仮名文字列は、全ての年において用例が見られる。これに対して、表4(B)が示すように、(11)(12)すなわち漢字平仮名交じり文における片仮名文字列の例はほとんどない。そして平仮名文字列の例は全て(14)「ふろくこうと」のように符号が併用されていない表記である。つまり、非卓立表記の(9b)の例のみということになる。

(14) 二人引の車なるは、高帽子の燕尾服にぞあなる、ふろくこうとが乗りたるは。(婦(3)27)

一方、漢字片仮名交じり文における片仮名文字列の場合は、(15)「ボルニヤ」のように符号が併用されない表記も見られるものの、多くは(16)「ボロナ」のように符号が併用されている。(14)

(15) 十三世紀ノ頃ニ伊太利ノボルニヤニ (論(5)62)

(16) 伊太利亞ボロナ府ニ大學校ヲ起シ (法(2)20)

こちらは、(9b)と(9d)を合わせてのこと、つまり、符号の併用による卓立表記が多いということになる。要するに、平仮名文字列においては非卓立表記が主であるのに対し、片仮名文字列においては符号が併用された卓立表記が主になるのである。

次に、表記体を構成する仮名と外来語文字列の仮名とが異なる場合((9c)・(8)・(5)(6)と(9)(10))の検討にうつる。ここで特に問題となるのは、(9c)と(9d)が合わせて用いられる場合、つまり、文字列のみで卓立表記となるところへ符号が併用された場合

である。

(17) 聖書。ほーまる。しえーくすびやー是レ人間及社會ノ

種々異リタル期限ニ於ケル (略) (論(5)56)

(18) 近松門左衛門は、東洋のシエクスピアなり。(論(8)98) 例えれば、(17)は、漢字片仮名交じり文において、外来語表記は平仮名文字列で行われている。卓立表記としてはこれだけでも機能するはずだが、符号が併用されている。また、(18)は片仮名文字列の同様の例である。(17)は表4(A)⑥に、(18)は表

4(B)⑩にあたる。

さて、表4を一見して分かる両者の大きな違いは、(B)⑩ではコンスタントに用例が見られるのに対して、(A)⑥では用例自体がない年があることである。(A)⑥において符号が併用された例のある年、すなわち、明治二三年と二四年について割合を示すと、二三年・二七・八% (6/(5+6)の数値)、二四年・二七年・三% (同)となる。これに対して(B)⑩では、二三年・五〇・〇% (10/(9+10)の数値)、二四年・七九・五% (同)となる。いずれの年も、(A)⑥よりも(B)⑩の方が割合が高くなっている。つまり、漢字平仮名交じり文中の片仮名文字列の方が、漢字片仮名交じり文中の平仮名文字列よりも符号が併用されやすいと考えられる。また、(A)⑥の明治二三・二四年は、雑誌の内訳に偏りがある。(B)⑩では、二三年においては『商』四語『法』二八語、二四年においては『商』三七語『法』四八語『婦』四語と雑誌にばらつきがあるのであるのに対し、(A)⑥では、明治

一三年、一四年とも全て『論』の用例なのである。さらに、『論』は、明治二三・二四年のみ、全ての文章が漢字片仮名交じり文となっている。このような漢字片仮名交じり文に偏った状況下では、平仮名文字列の例が増えるのは当然とも考えられる。⁽¹⁵⁾(A) (6)における符号有りの例は、特殊な状況下での特殊な例であるとみなせよう。つまり、表記体と異なる仮名の場合、平仮名文字列は符号が併用された卓立表記が主となる。これは、先に示した、表記体と同じ仮名の場合と同様の結果である。

以上から、平仮名文字列と片仮名文字列の違いを卓立表記・非卓立表記という観点から単純化してまとめると、次のようになる。

(19) 外来語平仮名文字列は、文字列単独で卓立表記にも非卓立表記にもなる。

(20) 外来語片仮名文字列は、卓立表記されるのが基本である。文字列単独ではなく、符号が併用される。

外来語片仮名文字列に符号が併用されることは、結果的に、片仮名文字列の卓立表記としての機能を補うことになってしまっている。逆にいえば、片仮名文字列は、符号の併用によってはじめて卓立表記としての機能が全うされる文字列であるということになる。

文字列単独で卓立表記たり得る平仮名文字列に対する、文字列単独では十分には卓立表記たり得ない片仮名文字列。これが、符号及び表記体を視座とした時に導き出される片仮名文字列の特質である。⁽¹⁶⁾

四・二 表記体の推移と外来語片仮名文字列の変容

前節では、符号及び表記体に注目することで、外来語片仮名文字列の特質を考察した。では、前誌群における表記体と片仮名文字列とは相関しているのだろうか。本節では、表記体の推移と片仮名文字列の変容との相関を探る。

三節に述べたように、片仮名表記外国地名における符号の有無の割合から、前誌群はⅠ期とⅡ期に分けられた。外来語全体ではどのようになるのか。表4 (B)を見ると、明治二五年までは、基本的に符号付き表記が優勢であるが、明治二六年からは符号を付さない表記が優勢となる。Ⅱ期の始まりとは一年ずれるが、これは二五年の用例を詳しく見れば解消される。二五年では人名の語数が多く、符号有りの例:七八語／符号無しの例:一四語である(二六年では三四語／二二語、二七年では四九語／三九語)。これは、二五年において、他の二年よりも多くの文章で人名の用例が確認されるためである(二五年では、人名の用例を含む文章数二三、二六年では一二、二七年では一四)。多くの文章で人名が使われたため、異なり語数が増えていると考えられる。一文章あたりの異なり語数の平均値は、二五年では三・四語／文章、二六年では一・八語／文章、二七年では三・五語／文章となり、二五年とそれ以降とではあまり差がない。このことを考えれば、外来語全体においてもⅠ期とⅡ期の区分を適用することができよう。さて、四・一で見たように、外来語片仮名文字列は文字列単独

表5

年	漢字片仮名交じり文					漢字平仮名交じり文						
	論	法	商	婦	農	計	論	法	商	婦	農	計
20	18					18	1					1
21	7	13				20	15	6				21
22	3	5				8	21	3				24
23	25	2	2			29		17	16			33
24	17			1		18		20	15	6		41
25	10				2	12	8	15	22	7	16	68
26	7				3	10	12	7		17	15	51
27			1		1	2	16	8	64	9	16	113

なせるからである。符号の形骸化が進んでいるということは、片仮名文字列が符号無しで卓立表記たり得る文字列へとなっていることをも表すと考えられるのである。

表記体は、このⅠ期Ⅱ期の区分と関連づけられる特徴を持つだろうか。表5は、外来語を含む文章の数を、表記体ごとにまとめたものである。色のついている欄が、今回の調査範囲である（図1と対応）。合計だけで見ると、漢字片仮名交じり文と漢字平仮名交じり文の文章数が逆転するのは明治二年からだが、雑誌ごとの違いにも目を配ると、明治二年を境界とするのは適当ではない。まず、二二年までは、『論』では合計と同じく漢字平仮名交じり文が優勢だが、『法』ではむしろ漢字片仮名交じり文の方が優勢である。また、明治二三・二四年は前節にも触れたように、『論』において漢字平仮名交じり文がない。全ての雑誌で漢字平仮名交じり文が優勢となるのは、明治二五年からのである。唯一の例外は『論』の明治二五年ではあるが、これも漢字片仮名交じり文の方が多いと言つても、文章数の差は二だけである。また、もしこの例外によつて漢字平仮名交じり文が優勢となる年を明治二六年と考えたとしても、表4(B)において符号を付さない片仮名表記が優勢となる年と全く一致することになる。要するに、表記体の傾向が漢字平仮名交じり文優勢になる年を二五年として、二六年としても、Ⅱ期の始まりとは一致するのである。漢字平仮名交じり文が優勢になるということは、それだけ、全て漢字平仮名交じり文である『太陽』の様相に近づいたということであ

る。そしてまた、片仮名文字列におけるⅡ期も、より『太陽』における様相に近づいているものである。つまり、表記体の推移と片仮名表記外来語の符号の有無の推移とは数量的に相関関係にあると考えられるのである。

先にも述べたように、符号の使用が形骸化していくということは、片仮名文字列が単独で卓立表記たり得る文字列になっていくことをも表していると考えられる。そして、本節で見たように、符号の有無の推移と表記体の推移との動向は相関していた。本節で示した結果は、片仮名文字列の特質の変遷と表記体の様相の変化⁽¹⁾が相関することを示唆していると言えよう。

五 おわりに

以上本稿では、符号の有無を手掛かりとして、『太陽』前誌群における外来語片仮名文字列の特質を考察してきた。その結果、前誌群における外来語片仮名文字列は、単独では卓立表記としての機能が不十分であることを指摘した。これは、平仮名文字列が単独で卓立表記たり得るのに比べて、片仮名文字列の大きな特質である。また、前誌群の片仮名文字列が、『太陽』に見られるような卓立表記たり得る片仮名文字列へと変容する時期は、表記体の様相の変化する時期と一致することも指摘した。これは、両者に相関関係が存在することを示唆するものである。本稿では、片仮名の特質の変遷と表記体の推移との相関関係を示すにとどめたが、この相関関係が意味するものについては別稿に述べたい。

【参考文献】

- 貝美代子（一九九七）「国定読本の外来語表記形式の変遷」『国語論究』6、近代語の研究、明治書院、一六〇～一八八頁
国立国語研究所（一九八七）『国立国語研究所報告』89、雑誌用語の変遷、秀英出版
- 小林雅宏（一九八一）「明治初期の翻訳書からみた外国地名の表記」『文研論集』（専修大学）八、一三九～一八一頁
武部良明（一九九一）「第一議会速記録の平仮名書きについて」『日本語史の諸問題』明治書院、四七七頁～四九一頁
坪谷善四郎（一九三七）『博物館五十年史』博物館
深澤愛（一九〇三）「漢字平仮名交じり文中における表記の選択」『博物館『太陽』における外国地名の漢字表記と片仮名表記』、『日本語科学』一四、二九～五三頁
深澤愛（一九〇四）「漢字仮名交じり文中における外来語表記の選択」『博物館『太陽』前誌群を資料として』、『待兼山論叢』、文学編』三七、三七～五〇頁
府川充男（二〇〇一）「日本語組版の歴史」『真性活字中毒者読本』柏書房
- 【調査資料】『論』①第一冊（明治20年～6月）②一三（21～6）③二五（22～6）④第二卷第六冊（23～6）⑤三一六（24～6）⑥四一（25～6）⑦五一六（26～6）⑧六一六（27～6）『法』①第一号（21～2）②一四（22～2）③第二卷第三号（23～2）④三一三（24～2）⑤四一三（25～2）⑥五一三（26～2）⑦二一三（27～2）『商』①第一号（23～10）②二四（24～10）③第二卷第九号（25～10）④三一～九（26～10）⑤四一～九（27～10）『婦』①第一卷第一号（24～1）②二一～（25～1）③二一～（26～1）④四一～（27～1）『農』①第一卷第一号（25～1）②二一～（26～1）③三一～（27～1）（商）④は現時点で所在不明のため、本稿ではとりあげない。）

- 【資料所在】『太陽』『CD-ROM版近代文学館⑥太陽』（日本近代文学館一九九九年）収録画像「論」立命館大学付属図書館「法」①香川大学付属図書館・②③⑤⑥⑦東京大学法学院付属図書館「商」①資料センター「明治新聞雑誌文庫」④國學院大学付属図書館「商」①②関西大学付属図書館・③東大明治新聞雑誌文庫・⑤「明治後期産業発達史資料」（龍溪書舎一九九七年）三七五巻所収の復刻「婦」「国立国会図書館所蔵近代日本婦人雑誌集成」マイクロフィルム「農」同志社大学付属図書館
- 【付記】本稿は、平成一六年度大阪大学国語国文学会口頭発表「漢字仮名交じり文中における外来語表記の選択－符号との関わりに注目して－」及び、日本語学会二〇〇四年度春季大会口頭発表「漢字表記から片仮名表記へ－近代における外来語表記の移行について－」の一部を元にまとめたものである。
- （1）外来語を漢字表記するか片仮名表記するかという観点でまとめられたものとしては、国立国語研究所（一九八七）や貝（一九九七）などがある。
- （2）（1）の五誌は坪谷（一九三七）の指摘による。（1）の五誌にはそれぞれの前誌もあるが、本稿では、発刊期間が他の前誌より長く、『太陽』に直接する（1）を主雑誌と考え、調査資料とした。
- （3）簡略表記は深澤（一〇〇三）でも述べたように、片仮名との対応を考えるには不適切なため、ルビ表記の例及び傍点の例は、本稿で注目する符号表記と併用されないため。
- （4）本稿で考察対象となる語の用例数は以下の通り。漢字表記：延べ一七八例・異なり一六四語／片仮名表記：一八一九例・九六〇語／平仮名表記：五〇九例・二七〇語。
- 注
- （1）（2）（3）（4）（5）『太陽』においてジャンルよりも刊行年を優先させて考察した深澤（一〇〇三）との比較を容易にするため。
- （6）以下、用例の所在は「雑誌略称・巻号」（調査資料）の丸数字で示す）・頁の順で示す。
- （7）一卷以降を取り上げないのは以下の理由による。本稿を成すあたり、予備調査として『太陽』における外来語片仮名表記の符号の有無を五年おき（一、六、一、一、一六、二、二六、三一卷の各第一号）に調査した。その結果、一卷以降は、いずれも符号無しの表記の占める割合（延べ語数で）が九割を越えた。これから、一卷以降は符号の使用が衰退した後の様相を呈しており、前誌群との比較には有効ではないと判断し、十卷までを取り上げることにした。
- （8）符号には、一重傍線、二重傍線、鉤括弧を含む。符号について語として区切ることのできる文字列を構成する文字及び符号を選択すること。
- 具体的には、文字列に漢字・平仮名・片仮名・アルファベットなどのいずれを用いるかを選択する、あるいは文字列に鉤括弧・一重傍線・二重傍線など、一語であることを示すことを目的とする符号を付けるか否かを選択すること。
- （9）二年のみ符号無しが優勢だが、I期の他の全ての年で符号有りが優勢なので、ここでは符号有り優勢の時期に加える。同様の理由で、IV期の三五年も符号無し優勢の時期に加える。
- （10）一八年は符号有りの数と符号無しの数が同数になっているが、圧倒的に符号無しが多い一七年よりは、僅差で符号有りが優勢な二九年に近いと考え、III期に分類した。
- （11）深澤（一〇〇三）で述べたように、『太陽』における口語文体は片仮名表記の受け入れ易さを持つ。『太陽』はここではIII期

にあたる。II期にあたる前誌群の口語文体にも片仮名表記の受け入れ易さがあると考へると、II期とIII期の数値が一定するのは、

文体が同様の性質を持つからと考へられる。口語文体の持つ性質が片仮名表記の数値を安定させ、結果として、表2の数値を一定させているのではないだろうか。

(12) 表記選択の定義は注8を参照。

(13) ここに該当する例は、「くるまん（革の売り口）」商②41「けーぶ」農②60「くるんでんめろん」農②60「びろうど」婦①39「ぱーるす（取引所）」商②47に「例」「ふろくこうと」婦③27に二例。

(14) 用例数は少ないが、雑誌にばらつきがあるので、例外的用法と考えるのは適當ではないだろう。

(15) 確かに、(一三)・(二四)・(二七)年においては符号無しの方が優勢になっているが、符号有りの場合の圧倒的な差に比べれば小さな差にすぎない。やはり全体としては符号有りの方が優勢である。

(16) 『論』(一三)・(二四)年収録の文章は、速記録が元であることを窺わせるものが多い。「兒島高徳考」(五月十五日史)、「日本ノ教育」(兩國中村櫻子著)、「論」(論⑤1)のよう、「元」になる講演を示したタイトルが多いのである。漢字片仮名交じり文で記された速記録に平仮名文字列が使用される例については、既に武部(一九九二)の指摘がある。武部によれば、帝国議会の議事速記録では、「官報附録の議事速記録が、公文書の書き表し方を踏まえなければならなかつたから」(四七七頁)漢字片仮名交じり文が用いられたが、速記録として「発言のままの口語をそのまま書き表そとすれば、何らかの処理を加えなければならなかつた」(四七八頁)ため、「どノ国トどノ国トノ約束ハどうナツテ居ル」というような表記法をとつたということである。武部が注目した「口語用の語や俗語・方言」と、外来語平仮名表記と全く同列に扱うことは難しいが、何らかの関連を持つ可能性はある。帝国議会の議

事速記録が初めて作られた第一議会が開かれたのは、明治二三年である。

(16) 三節でたてた仮説は、基本的に文字列単独で表記される漢字文列と、文字列単独では卓立表記とならない片仮名文字列の違いによるものと思われる。この点については改めて論じたい。

(17) 最後に、筆者の偏りがないかを確認する。総文数四七〇のうち、筆者名が明記されていないものは一六九ある。残り三〇一の文章を記した人物は二三六名、そのうち一度しか名前の出ない人物は一九九名のぼる。最多出現回数も内藤恵叟の六回であり、以下、五回二名、四回三名、三回一二名、二回二〇名と続く。このことから、本稿で述べてきた特質や傾向といったものは、個人に左右されたものではない、全体的なものであると言えよう。